広告

いしかり産

小林卓也さん（花畔で有機野菜全般生産 農業歴9年）
青木豊さん（北生振で大根・ニンジン・じゃがいも生産 農業歴15年）
吉田茂樹さん（生振で米・麦・牧草・玉ネギ生産 農業歴9年）
大村喜輝さん（生振で花き生産 農業歴9年）
熊倉雄一さん（北生振で米・麦生産 農業歴15年）

農業青年たちが自らをPR「いしかり塾」

石狩市では現在、約1,000人の農業者が米や麦、野菜や果物などの生産にいそしんでいます。中には、そんな自分たちの農業を自らPRしようと活動する団体もあります。「いしかり塾」です。

横のつながりが少ない中、仲間づくりの場にしてもらおうと石狩市農業総合支援センターが呼びかけたのがきっかけ。3年目の今年、6人の推進員が中心となって月に1度程度、交流の場を持って、さまざまな活動を展開しています。

6月3日、JAいしかり地物市場「とれのさと」で行われた、石狩産小松菜使用のスコーン販売もそのひとつ。天使大学の農業サークル「北の食物研究所」の協力を得て実現したこの企画は、高岡のミニトマトの連作障害対策として植えられた小松菜を、有効活用しようと取り組んだもので、学生にはレシピ考案のほか、収穫の体験もしてもらいました。

「こういうことをやっていると、仲間同士、自然と情報交換もできます」とは推進員の一人、熊倉雄一さん。「いしかり塾」初の企画「婚活バスツアー」では、メンバーの大村喜輝さんのところでカーネーションの収穫体験を盛り込みました。「実は僕たちも初めての経験で、あのときはとても勉強になりました」

▲「いしかり塾」プロデュース「婚活バスツアー」の様子。

夢は、まちに定着するものを自分たちでつくること。そのためにも熊倉さんいわく、「まずは『いしかり塾』を市民の皆さんに知っていただけるよう頑張ります!」

◎石狩随想 63

本

あるテレビのクイズ番組で、何ページ以上あるものを「本」とするのかとの質問。全く分かりませんでした。1964年ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は表紙を入れず、本文で49ページ以上とし、印刷された不定期刊行物としている。ご存じの方にとっては何を今更という事なのでしょうが　◆パピルスは冊子ではなく丸めて使われていた。紙を手にする事のできなかった小アジアの民族は、パーチメントと言われる羊の皮を利用したとのこと。折りたたむ必要性に運搬の合理性も加わり、後、つづり本へと進み、今でも欧州にはペーパーナイフ文化として名ごりを残している。「本」は文化の進展とともに必然的に誕生し、普遍性を有している故に、文字を持つ民族は「本」にたどり着いている　◆2010年の本の発行点数は7万8353点（「出版年鑑2011」より）と膨大な数を示す中、死語辞典に仲間入りしそうな「良書」は自らにおいて選書する他ない、もとより人それぞれなものではある。怖いのは中国から戦後もたらされた一辺刀（イーペンタオ）。一辺倒は他動的背景をもつと一層怖いものを感じる、良書はむしろ辛口で厳しいものであり、可能性の門（とびら）を開いてくれる。「本」は草木の根もと、基本の「本」である。　（市長）